

検査項目案内

さいたま市民医療センター臨床検査科

項目名	正式名称	説明	基準となる値	
WBC	白血球数	体外から浸入する細菌やウイルスと戦ったり、免疫やアレルギーに関連した様々な働きをします。また、薬の副作用で減少することがあります。好中球・好酸球・好塩基球・単球・リンパ球の五種類の細胞からなり比率の違いは病態の把握に役立ちます。	3500 ~ 9700	/μL
RBC	赤血球数	呼吸により取り込んだ酸素を体中に運搬します。数が減少すると貧血、増加すると多血症の指標となります。	男 438 ~ 577 女 376 ~ 516	万/μL
Hb	ヘモグロビン	鉄分の不足などによる貧血や多血症の診断根拠となります。	男 13.6 ~ 18.3 女 11.2 ~ 15.2	g/dL
Hct	ヘマトクリット	血液中の赤血球の占める割合を表します。	男 40.4 ~ 51.9 女 34.3 ~ 45.2	(%)
MCV	平均赤血球容積	赤血球1個あたりの容積を示しています。貧血の原因特定に有用な検査項目です。	男 83 ~ 101 女 80 ~ 101	fL
MCH	平均赤血球ヘモグロビン量	赤血球1個あたりのヘモグロビン量を示しています。	男 28.2 ~ 34.7 女 26.4 ~ 34.3	pg
MCHC	平均赤血球ヘモグロビン濃度	一定容積の赤血球に含まれる、ヘモグロビン量を示しています。貧血の原因特定に有用です。	男 31.8 ~ 36.4 女 31.3 ~ 36.1	(%)
Plt	血小板数	出血したときに、集まって出血を止める働きをします。低下すると、あざや出血が起こりやすくなります。	140 ~ 379	千/μL
NEUTRO	好中球	細菌と戦う白血球で、感染や炎症で増加します。	42 ~ 74	(%)
Eosino	好酸球	アレルギーや寄生虫感染に関与した白血球です。	0 ~ 7	(%)
Baso	好塩基球	アレルギーに関与した白血球です。	0 ~ 2	(%)
Mono	単球	菌など異物を取り込み排除する白血球です	1 ~ 8	(%)
Lymph	リンパ球	免疫に関与し、ウイルスと戦う白血球です	18 ~ 50	(%)
TP	総たんぱく質	値の変動は、蛋白を作る肝臓や濾過する腎臓の異常の指標となります。	6.5 ~ 8.2	g/dL
ALB	アルブミン	血清総蛋白の50~70%を占め、カルシウム等の各種物質の運搬に重要な成分です。栄養の摂取や吸収障害など全身状態の参考となります。	3.7 ~ 5.5	g/dL
AST	アスパラギンアミノトランスフェラーゼ	主に肝臓、心臓、骨格筋の細胞の中にある酵素です。これらの臓器に障害が起こり細胞が壊れると、数値が上昇します。	10 ~ 40	U/L
ALT	アラニンアミノトランスフェラーゼ	肝臓の細胞に含まれる酵素で、肝臓に障害があるとき増加します。肝臓の異常以外で上昇することはほとんどありません。	5 ~ 45	U/L
LD	LDH、 乳酸脱水素酵素	肝臓、心臓、肺、赤血球などに多く含まれる酵素で、これらの組織の細胞が壊れると数値が高くなります。	120 ~ 245	U/L
ALP	アルカリホスファターゼ	肝臓や胆道系に障害があると数値が高くなる酵素です。また骨の異常でも高くなることがあります。	38 ~ 113	U/L
LAP	ロイシンアミノペプチダーゼ	全身の臓器に広く分布する酵素の一つです。肝臓や胆道系の病気の指標となります。	30 ~ 78	U/L
γ-GT	ガンマグルタミルトランスペプチダーゼ	肝細胞に多く存在する酵素です。肝障害や胆道系の疾患で数値が高くなります。また、飲酒との関係が高くアルコールの常習を検出する目安となります。	男 0 ~ 79 女 0 ~ 48	U/L
CHE	コリンエステラーゼ	肝臓で作られる酵素です。数値の減少は、肝臓の機能低下の指標となります。	男 245 ~ 495 女 198 ~ 452	U/L
CK	クレアチニンホスフォキナーゼ	心臓や骨格の筋肉に存在する酵素です。これらの組織が壊れると数値が高くなります。	男 50 ~ 230 女 50 ~ 210	U/L

項目名	正式名称	説明	基準となる値	
T-Bil	総ビリルビン	肝臓で作られ、胆のう、十二指腸、便という経路で体から排出されます。その途中で障害があると数値が高くなります。黄疸の指標です。	0.3 ~ 1.2	mg/dL
T-CHO	総コレステロール	細胞やホルモンつくる材料の一つです。過剰になると、心筋梗塞や脳梗塞を起す原因となります。	150 ~ 219	mg/dL
HDL-C	高比重リポ蛋白コレステロール	善玉コレステロールと呼ばれ、動脈硬化を防ぐ働きがあるとされています。たばこや運動不足で低下します。	40 ~ 90	mg/dL
LDL-C (直接法)	低比重リポ蛋白コレステロール	悪玉コレステロールと言われ、多くなりすぎると動脈硬化を進める方向に働きます。	70 ~ 139	mg/dL
TG	中性脂肪	食物から吸収された糖質や脂肪から作られます。皮下脂肪や肝臓に蓄えられます。食後は高値となります。動脈硬化の促進に関連します。	50 ~ 149	mg/dL
UN	尿素窒素	食物中のタンパク質などが代謝された後に出来る、窒素を含む老廃物です。腎臓や肝臓の機能の障害や脱水症状・タンパク質の過剰な摂取によって値が高くなります。	8 ~ 20	mg/dL
Cr	クレアチニン	腎臓の機能が低下すると尿中への排泄が減少し、血液中に増加します。腎臓機能の指標となります。	男 0.65 ~ 1.09 女 0.46 ~ 0.82	mg/dL
UA	尿酸	肉などプリン体を多く含む食物を摂取すると、増加します。腎臓や肝臓の機能に障害があると数値が高くなります。	男 3.6 ~ 7 女 2.7 ~ 7	mg/dL
Na	ナトリウム	体液の浸透圧維持のため、各種ホルモンや腎臓により血中濃度がコントロールされています。脱水、腎障害、下垂体や副腎由来のホルモンに異常があると、血中濃度が高くなります。	135 ~ 145	mEq/L
Cl	クロール	呼吸不全や腎障害など体液の酸性・アルカリ性のバランスが崩れると異常値となります。	98 ~ 108	mEq/L
K	カリウム	神経や筋の細胞機能維持に重要な役割を果たしています。	3.5 ~ 5	mEq/L
Ca	カルシウム	副甲状腺由来のホルモンの骨や腎臓に対する作用により、血中濃度は厳密にコントロールされているため、食事の影響はほとんど受けません。	8.2 ~ 10	mg/dL
IP	無機リン	腎障害やホルモンの異常で高値となることがあります。食事の影響を受けやすく、日内変動も大きい項目です。	2.5 ~ 4.5	mg/dL
Mg	マグネシウム	腎不全などで高値になることがあります。呼吸不全・下痢嘔吐などで低値になることがあります。	1.8 ~ 2.4	mg/dL
Fe	血清鉄	鉄はトランスフェリンと結合して存在し血清鉄として測定されます。悪性貧血や再生不良性貧血などで高値となり鉄欠乏性貧血では低値となります。	男 60 ~ 210 女 50 ~ 170	μg/dL
UIBC	不飽和鉄結合能	鉄と結合していないトランスフェリンを鉄に換算しているのが不飽和鉄結合能といいます。鉄欠乏性貧血では高値となり、悪性貧血や再生不良性貧血などで低値となります。	男 120 ~ 330 女 110 ~ 425	μg/dL
血糖	血糖	血中のブドウ糖の濃度です。インスリン等のホルモンにより調節されています。糖尿病などにより調節機構に異常が起きると異常値となります。	70 ~ 109	mg/dL
HbA1c (NGSP)	ヘモグロビンエーワンシーグリコヘモグロビン	過去の平均的な血糖値を反映し、約1~2ヶ月に及ぶ血糖のコントロール状態を知る指標となります。HbA1c(JDS)に代わって、平成24年から使われるようになります。	4.6 ~ 6.2	%
CRP定量	C反応性タンパク	炎症や組織の破壊が起こると、すぐに増えるタンパク質です。回復と共に減少するので炎症症状の指標となります。	0 ~ 0.3	mg/dL

検査項目案内

さいたま市民医療センター臨床検査科

尿検査

項目名	正式名称	説明	基準となる値	
比重-尿	尿比重	尿に含まれる全成分の濃度を示し、腎臓における希釈・濃縮能力を反映します。健常人では尿比重と尿色調の濃さは比例し、尿比重と尿量は反比例します。	1.008 ~ 1.034	
pH-尿	尿pH	健常人の尿pHは6.0前後で弱酸性ですが、食事、運動、睡眠などの生理的要因によって幅広く変動します。抗生剤治療や腎結石の形成防止のため、酸性・アルカリ性のpHを維持する必要がある場合に重要となります。	4.8 ~ 7.5	
蛋白定性-尿	尿蛋白定性	たんぱく質は、体の重要な栄養分であるため、本来は尿に排出されないものですが、腎臓の働きが悪くなると、外に漏れ出てきます。	(-)	
糖定性-尿	尿糖定性	尿に含まれるブドウ糖を測ります。健常人であれば、尿から糖はほとんど排出されません。腎臓の機能に異常があるときや、血糖値が一定数値を超えたときなどに、尿に糖が出現します。	(-)	
ウロビリ定性-尿	尿ウロビリゲン定性	胆汁中に排泄されたビリルビンが腸内細菌の働きによって変化したものがウロビリノゲンです。健常人でも微量のウロビリノゲンが検出されるため、±が正常値となります。多く検出されても、また検出されなくても異常です。	normal(±)	
潜血定性-尿	尿潜血反応定性	尿に赤血球が混入した場合に陽性になります。腎臓だけでなく、尿管、膀胱、尿道からの出血が考えられます。また女性では月経中でも陽性になることがありますので、その期間を避けて再検査します。	(-)	
ケトン体定性-尿	尿ケトン体定性	ケトン体は脂肪がエネルギーとして使われたときに発生する物質です。糖尿病や飢餓状態など、栄養を十分に取れていない時に尿中に出現します。	(-)	
ビリルビン定性-尿	尿ビリルビン定性	赤血球の中のヘモグロビンが処理されてできる黄色の色素です。通常は尿中にビリルビンが出てくることはありませんが、陽性の場合には、急性肝炎や胆道閉塞などの疾患が疑われます。	(-)	
亜硝酸塩定性-尿	尿亜硝酸塩定性	尿に含まれる硝酸塩が細菌により分解され、亜硝酸塩が生成されます。本来尿路は無菌的ですが、陽性となった場合には細菌の増殖を疑います。	(-)	
白血球定性-尿	尿白血球定性	尿中に出現する白血球は約95%が好中球です。膀胱炎、腎盂腎炎、尿道炎、前立腺炎などの尿路感染症では多数の白血球を認めます。	(-)	